

改訂の序

本書の刊行からおおよそ2年が経過しました。この間に多くの病院において、医師、薬剤師、看護師によるレジメンの妥当性を評価する委員会が発足しています。診療報酬における外来化学療法の評価の条件とされたことが影響していると考えられますが、院内で使用するがん化学療法のレジメンをエビデンスに基づいたものにしようとする努力がうかがえます。

本書は、エビデンスに基づいたレジメンを選択し、各レジメンごとに、安全に施行するためのチェックすべきポイントや患者指導のポイント、抗がん剤調製時の注意点などを解説し、がん治療にかかわる多くの医師や薬剤師などに活用してもらうために刊行したものです。刊行後は多くの薬剤師の皆さんから、抗がん剤を投与する際の輸液量や投与時間などが詳細に書かれているのでとてもわかりやすい、患者指導にあたってもポイントが書かれているので若い薬剤師にも参考になる、抗がん剤調製時の注意が役に立ったなどの感想をいただきました。がん化学療法に携わる医師や看護師にも好評であると聞いています。本書は薬剤師によって書かれていることが評価されているのだと思います。今回の改訂にあたって掲載レジメンの見直し、特に新たに発売された抗がん剤や新たな適応が追加された抗がん剤を含むレジメンを追加しました。また、新たな制吐薬が発売されたことから多くのレジメンについてもガイドラインに基づき前投薬の部分を改訂しました。また、できるだけ減量基準や中止基準についても記述しましたので、さらに使いやすいハンドブックになっていると思います。

最近では、分子標的薬の開発がますます盛んになっており、分子標的薬固有の副作用対策が必要とされます。また、効果も副作用も注射剤と同様の経口剤の分子標的薬も登場しています。本書が抗がん剤による治療を安全に有効に行うために、がん化学療法チームで活動している薬剤師をはじめ、医師、看護師の方々、さらには薬局に勤務する薬剤師の方々の参考となることを願っています。

2011年1月

臨床腫瘍薬学研究会 会長
明治薬科大学医薬品安全管理学 教授
遠藤 一司